

大月遺跡の敷石住居跡について

笠原 みゆき

- | | |
|----------------|-------------|
| 1 はじめに | |
| 2 大月遺跡の概要 | c) 炉の位置 |
| 3 敷石住居の問題点について | d) 埋甕の有無 |
| a) 住居の形と敷石の割合 | 4 中谷遺跡と比較して |
| b) 柱穴構造 | 5 まとめ |

1 はじめに

遺跡の発掘調査は、不況ながらも全国で数多く行われ新聞紙上を賑わせている。そのようななか、山梨県でも発掘調査は全域でなわれ貴重な資料の発見が相次いでいる。今年度、筆者は、縄文時代後期の極めて珍しい敷石住居跡を調査する機会に恵まれた。今までにも、中谷遺跡・大月遺跡の2遺跡で十数軒の保存状態の良い敷石住居跡を調査してきた。敷石住居跡という地域や時代が限られている遺構を調査していると、よく見学者から聴かれることがある。「なぜ、家の中に石を敷くのですか」。この質問は、とても難しいもので敷石住居跡の研究のうえでも欠かせない問題点といえる。これについては、今まで様々な考え方がなされてきた。家の奥に祭られた祭壇が発展したものなのか、「生」に関する埋甕の周辺から敷石という風習が広まったものなのか。しかし、いまだ誰もが納得できる結論にたどりついてはいない。「石を敷く」という行為は、今まで造られてきた竪穴住居とどんな関係があったのだろうか。敷石住居も竪穴を掘ってその床に石を敷いている。平地式もあったかもしれないが多くは堀りこみをもっている。土の上と石の上にどのような違いがあったのか。考えればきりがないほど不思議さが増す。これらが、自然に生み出されたものなのか、元々あった何らかの風習が発展したものなのかは謎の多いところである。

敷石住居跡を語るとき、そもそも、人が生活する場所なのか、祭りをを行う場所なのか。普通の村を作る一つの構成家族が住んでいたのか、特殊な人が住んでいたのか。このこともよく問題にされている。筆者自信も、実際に敷石住居跡を調査するまでは、特別な意味をもって造られたものだと考えていた。しかし、今では竪穴住居跡と同じく敷石住居跡も集落を構成する一つの住まいと考えている。今回、敷石住居跡について考えようと思った背景には、これらのような、様々な疑問が自分自信ではわかりにくいのために、他の研究者の問題提起から、その答えを導き出す何らかの手掛かりにでもなるのではないかと思ったからである。

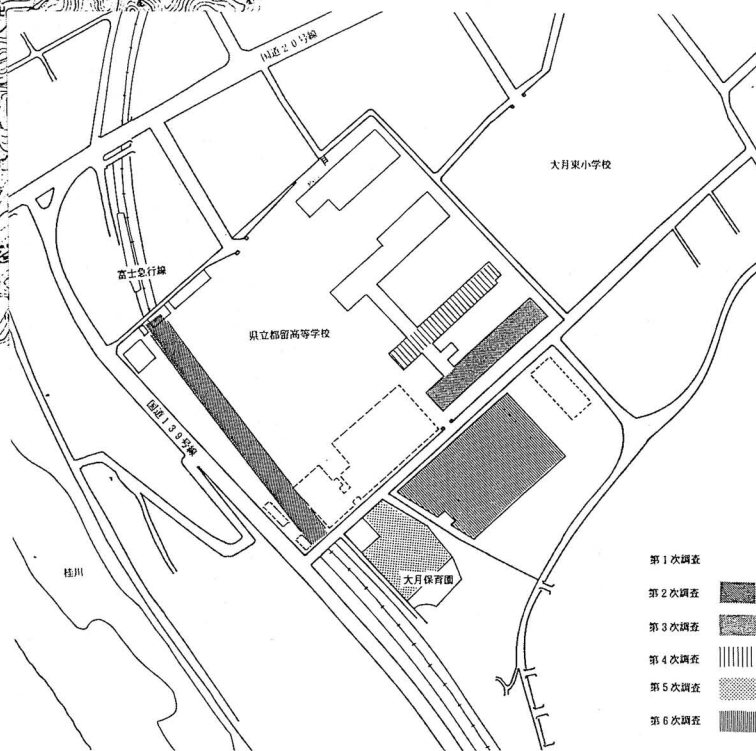
2 大月遺跡の概要

大月遺跡は、山梨県東部の大月市と都留市の市境に近く、国道139号線沿いに位置している。また、標高は366mほどを測り、山中湖を水源とする桂川が、笹子峠から流れくる笹子川と合流するほんの500mほど手前の河岸段丘上にある。現在は、そのほとんどが、山梨県立都留高等学校の敷地内となっている。

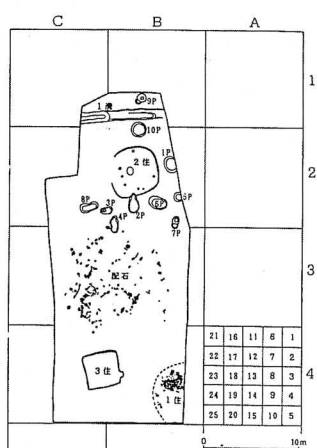
遺跡は過去数回に渡って発掘調査が実施され⁽¹⁾、縄文時代中期から後期と奈良・平安時代の2つの時期に生活があった集落跡であることがわかっている。敷石住居跡あるいは配石遺構が初めて確認されたのは、第2次調査で、炉の周辺に敷石があったことが記されていた。第1図の中央に各調査区を示したが、第2次調査区はグラウンド西端に位置している。遺構は中でも、第5次調査区に近い部分から確認されていた。現在、発掘調査は第10次まで行われ、遺跡の南辺部から西辺部と都留高校の敷地内はほぼ調査が終了している。平成元年に大月市



遺跡●置図 S=1/25,000



発掘調査区 略図



第5次調査 遺構配置図



第6次調査 遺構配置図

第1図

教育委員会がおこなった第5次調査では1軒、続く平成6年に山梨県埋蔵文化財センターでおこなった第6次調査では6軒、合計7軒の敷石住居跡が発見されている。これらのほとんどは縄文時代中期終末から後期初頭に該当する。第5次調査の1軒は、出土した土器から縄文時代後期と位置づけられているが、整理途中のため詳細は不明である。また、敷石住居の関連として、敷石を一部残すもの1基、炉のみが3基、竪穴住居跡（敷石が外された可能性あり）1軒も存在する。なお、第5次と第6次調査区では、6m程の道路を挟んで東西に位置し、現状では、山梨県立都留高等学校の体育館（第6次）と大月市大月保育園（第5次）の建物が建設されている。この2箇所に挟まれた道路も、平成8年度に大月市教育委員会と山梨県埋蔵文化財センターによって発掘調査がおこなわれたが、遺物以外、はっきりした遺構は確認されなかった。また、大月バイパスの建設に伴って、平成7年から平成9年まで大月保育園の跡地など南側部分を調査してきた。これらの結果、現在の都留高校校舎から体育館にかけて、縄文時代中期曾利Ⅱ～Ⅲ式を最も古い段階として曾利Ⅴ式・加曾利E4式・称名寺式に相当する時期まで住居が作られている。第6次調査区の西側では、縄文時代後期の土器集中区が約600㎡の範囲で出土しており、第5次調査区ではこの時期の遺構が確認され、この南に位置する第7次調査区からも縄文時代後期の遺構や遺物の出土が目立つようである。このように、当遺跡全体を見ていくと、縄文時代中期から後期まで継続的に生活が営まれたと推定できる。

3 敷石住居の問題点について

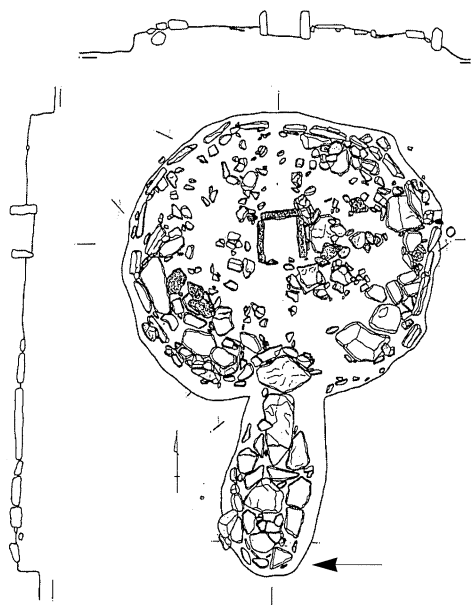
敷石住居跡がいつ頃から出現し始め、消滅してゆくのかという問題は、今後の資料の増加を待たなければ結論のでないものである。1996年に神奈川県埋蔵文化財センターにおいて「平成7年度かながわの遺跡展謎の敷石住居」が企画された。これはパネル展示であったが、このテーマに沿ったパネルディスカッションも行われ、今まで、紙面で論じられてきたことが壇上で話し合われたのである。この時の資料集や展示図録は、敷石住居を学ぼうとするとき、概説書的な役割を果たしてくれた。今回、この図録を参考にして大月遺跡の敷石住居を見直すことにした。

敷石住居の発展は、大きく4段階に分けられ出現期・成立期・発展期・終末期とされている。大月遺跡の敷石住居跡はここでいう成立期となるが、成立期の敷石住居跡の特徴は、「円形の主体部に長方形の張出部が付く典型的な柄鏡形（敷石）住居」となり、敷石の方法として「全面敷石のものは関東山地寄りの諸丘陵、主体部周縁や張出部周辺など部分的に敷石をもつものは武蔵野台地や下末吉台地などに、敷石をもたないものは大宮台地や下総台地北西部に多く見られ、地域的な違いが認められる」こと、また、構造状の特徴として「竪穴住居から敷石住居への変化は、円形から柄鏡形という形態変化だけでなく、柱穴構造においては主柱穴型から壁柱穴型に、炉の位置は奥壁から出入口方向へという構造的な変化をする」さらに、「この時期の敷石住居には前段階と同じように埋甕を持つ例が多く見られ、その大半が張出部に設置されている」ことがあげられている。これに基づいて形態の明確な1・2・7・10・11・13号住居跡について見直してみる。

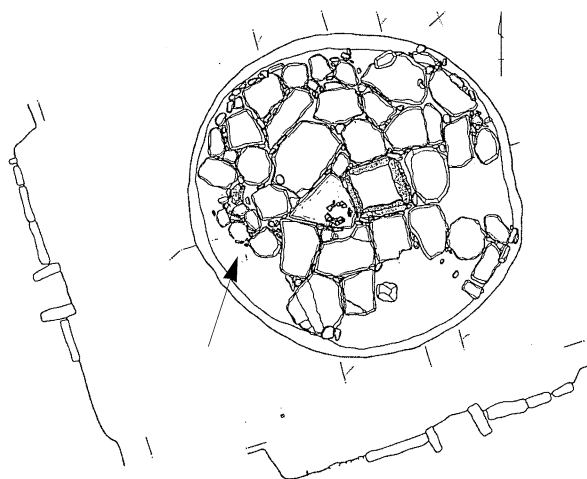
a 住居の形と敷石の割合

住居の形態は、11号住居が円形をしている以外は、皆、柄鏡形敷石住居である。1号住居は、居住部⁽²⁾の堀方が円形で敷石は主軸に並行な面をもつ六角形である。柄は他の住居に比べると明瞭ではないが、平石と自然石を階段状に組み合わせているように見える。柄の先端に、階段状の施設を有するものは13号住居にもみられるものである。

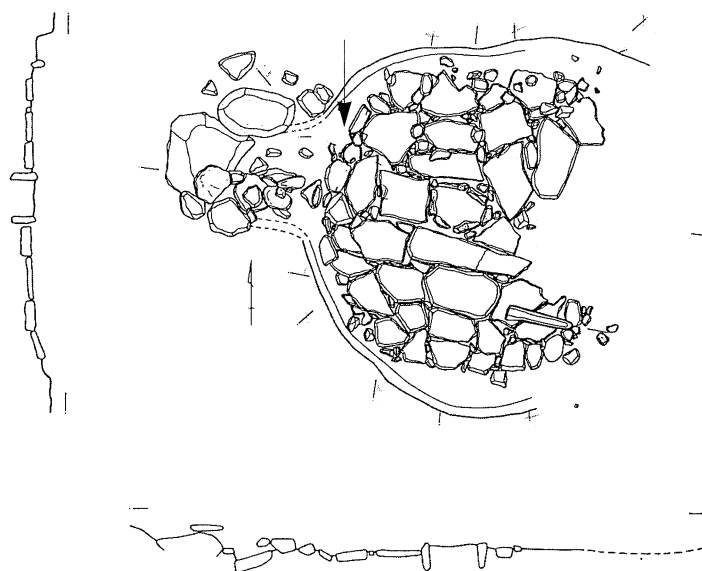
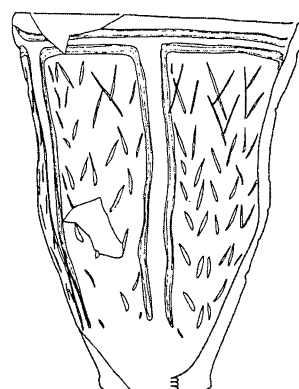
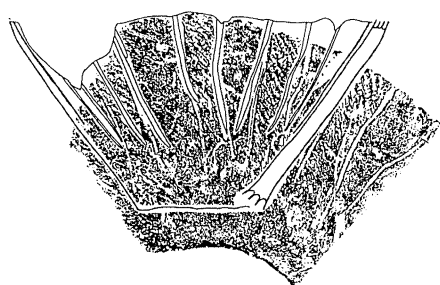
敷石については、1号住居は奥壁側が掘削されていて敷石がないが、居住部はほぼ全面に敷石がされていたものと推定される。7・11・13号住居も部分的に敷石が抜けているが、柄までびっしり石が敷かれている。特に、7号住居の柄は、石棺墓と見間違ふほどであった。2号住居は、壁際にぐると一周敷石が巡り、炉の西側にも一部敷石がある。10号住居は縁石の側に敷石は敷かれず、炉と奥壁の間と、炉の西側に一部敷石があるだけであった。この遺跡では、平石と平石との間に小礫を埋め込んで、比較的丁寧な敷石をする傾向がみられる。このた



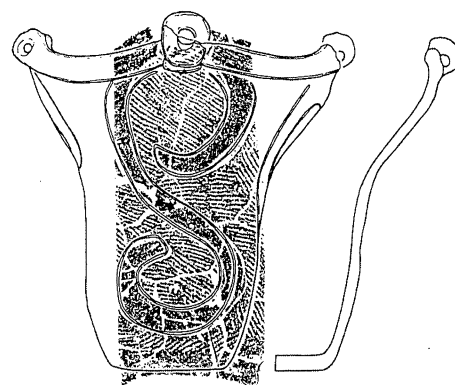
2号住



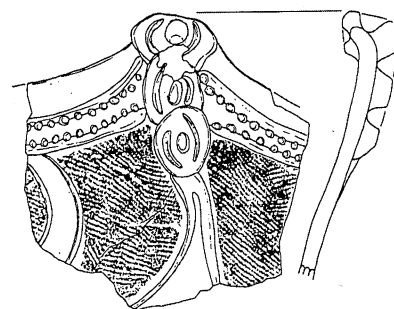
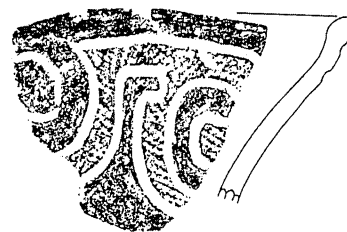
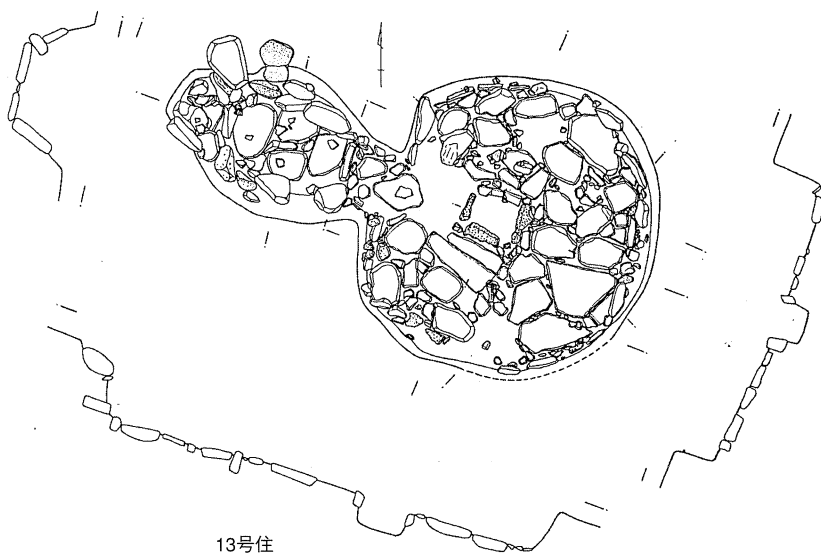
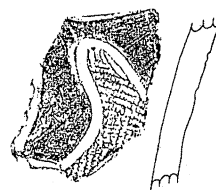
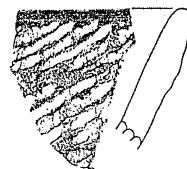
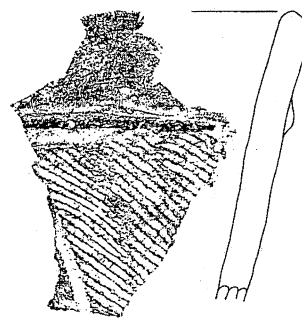
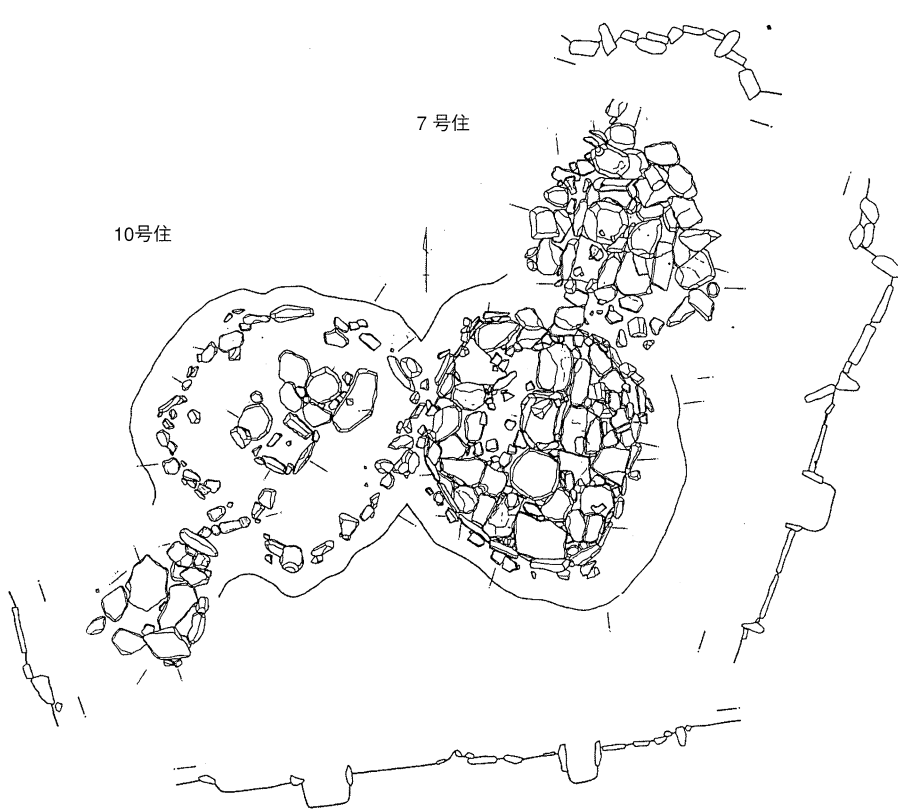
11号住



1号住



第2図 1・2・11号住居（遺構 S = 1/80. 土器 S = 1/6）



第3図 7・10・13号住居跡（遺構 S = 1/80. 土器 S = 1/3）

め、10号住居はわからないが、2号住居については、居住部の中に小さな礫が沢山残されていたことから、本来は敷石があったのではないかと推定される。

b 柱穴構造

今回調査した6軒とも、柱穴は確認できなかった。1・7・11・13号住居はほぼ全面に敷石が施されているので、居住部内側に柱穴があるとは考えにくい。そのため、居住部に巡らされた縁石の周辺か、それより外側にある可能性が高いと言える。2号住居は、敷石が全面に確認できず、居住部内側に柱穴があったともいえるが、縁石と縁石の間に隙間があるため、壁柱穴とも考えられる。10号住居は、2号住居と同じ状態である。

c 炉の位置

敷石住居が確認される以前の段階では、炉の位置に違いがあるということだが、2・11号住居以外は、円形の中心より入口部分に炉が近く造られていることがわかる。1号住居は1.5 : 1.6 ~ 1.8、2号住居は1.5 : 1.3、7号住居は1 : 1.5、10号住居は1 : 1.6、11号住居は1.8 : 1.4、13号住居は1.2 : 1.6であった。ちなみに、今回の調査区で唯一通常の竪穴住居跡で、曽利Ⅲ式に相当する9号住居では、3.1 : 1.2と極端に奥壁に炉が寄っている。このことから、炉が居住部の中心から奥壁に寄るか、入口部によるかで時期に多少の差が生じることになる。6軒の住居跡のなかで、2号住居と11号住居が他の住居より若干古く位置づけられることになる。

d 埋甕の有無

埋甕が埋設されていたのは1・2・11号住居の3軒であった。1号住居は、中心軸から入口に向かって右側にあり、居住部の敷石が検出されると同時に確認されていた。本来は、敷石よりやや低い位置に埋められているものだが、はっきりと埋めた場所がわかるようにしておく何らかの理由があったのかもしれない。加曽利E4式の深鉢で正位の状態で検出されている。2号住居では、柄の先端部分に埋設されており、敷石がその上に敷かれていた。これもまた、加曽利E4式の深鉢で、同部下半分よりさらに下位置から底部のみが、正位の検出された。11号住居は中心軸上、しかも入口部分に埋設されていた。これは、まさに、居住部に足を踏み入れたとき、踏みつけてしまいかねない位置にあり、1号住居同様、意図的につくられた可能性が指摘できる。敷石住居の成立期としての特徴からいえば、入口付近と柄の先端部分に埋甕を擁する例が多いということで、これが発展期になると埋甕が作られなくなるという。このことからいえば、この3軒が多少古手となることになる。

以上、単純に敷石住居の成立期の特徴に大月遺跡の敷石住居を照らし合わせてきたが、2号住居は、典型的な柄鏡形敷石住居跡であり、敷石は柄の部分が全面で居住部は少ない。居住部の敷石の状態から、柱穴が居住部内に主柱穴としてあっても、縁石沿いに壁柱穴として存在してもおかしくない状態を呈している。また、炉も中心からやや奥壁沿いに位置し、埋甕も柄の先端部分に埋設されるという条件を見事にクリアし、大月遺跡の敷石住居のなかでは最も古い様相が窺える。遺物は、加曽利E4式の埋甕と曽利V式の二通りの土器が出土している。他の住居跡には、称名寺式が混在しているのに、2号住居からの出土例はないことから裏づけることができよう。その次に、古手にあげられるのは、埋甕を持っている1・11号住居である。この2軒は、敷石の敷き方が、入口から炉を中心に放射上に配置されている様が類似しており、主軸の方向が同じである。しかし、炉の位置が1号住居は入口に近く、11号住居は奥壁に近いという違いが生じている。単純に判断すれば、2号住居に続くのは11号住居で1号住居はやや新しいと言えるかもしれない。この次は7号と13号住居で、柄の部分がやや発達していく。7号住居は、石棺墓のような、しっかりした石組、その周辺を平石で囲むことを行っている。13号住居の柄は先端に階段状の施設があり、柄の長編がやや膨らみ、柄の発達を窺えさせる。最後に7号住居を切るかたちで確認されている10号住居となる。この住居は、とりわけその構造に特殊なものはないが、居住部と柄の連結する丁度その場所から、石棒が1点出土している。この石棒は、かなり精巧なつくりで信仰の対象物として連結部に立てられていたものとも考えられている。それ以前は、埋甕に信仰の対象が注がれていたが、この頃か

ら石棒にとって変わることになるのだろうか、今後の過大となるであろう。

4 中谷遺跡と比較して

今回、大月遺跡の6軒の敷石住居について、成立期の特徴を検証してみた。その結果、以外にも、各々の特徴と遺物から、時期的な差が生じることになった。このことが、他の遺跡でも起こりえることなのか、それとも、大月遺跡だけに生じたことなのか。多少の不安が残ったため、以前調査した中谷遺跡の敷石住居についても、簡単に見てみようとおもう。

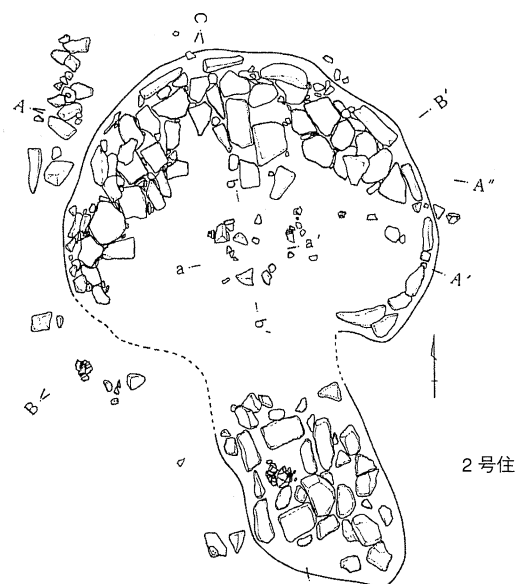
中谷遺跡では、10軒の敷石住居が確認されており、中期末に該当するものが7軒、後期始めに該当するものが3軒であった。中期末（加曽利E4式と曾利V式）にあたるものは、2・3・4・5・9・10・15号住居で、特に、2・3・4・9号住居は方位もほぼ位同じとなる。敷石も、奥壁部分と柄の部分に限定されているようである。この他の、5号住居は方位が全くの逆向きになり、10号住居は炉とその周辺に敷石が残るだけである。中谷遺跡のなかで、比較的大きく残存状態の良い12号住居はほぼ南北に主軸を持っている。今回、検証したのは成立期についてであるので、10軒のうちの7軒について検証を行う。まず、住居の形態と敷石の割合だが、10号住居以外は柄鏡形敷石住居跡である。2・3・4号住居は奥壁側と柄の部分に敷石を持ち、5・12号住居はほぼ全面に敷石があったのだろう。9号住居は柄の部分しか残存していない。10号住居は炉を中心に敷石があるだけである。柱穴は4・5・10号住居しか確認できなかった。4号住居は居住部内部に5本の柱穴があり主柱穴である。5・10号住居は、壁柱穴あるいは居住部の外側に柱穴がまわるものと思われる。炉の位置については、2号住居が1:2、3号住居は2.2:1、4号住居は2.4:1.8、5号住居は1.8:1.2、12号住居は2.2:1.8、9・10号住居は測定が不可能だった。埋甕は、2・9号住居にあり。2号住居は、柄の先端中心軸上にあり、深鉢の胴下半分が正位で埋まっていた。時期は不明だが、住居内資料は曾利V式であった。9号住居は居住部内、入口に向かって右側に正位で埋まっていた。底部を欠損した鉢だが無文で時期はわからない。他の土器から曾利V式と加曽利E4式の土器が出土している。以上のことから、住居の時期的な差が生じるかということだが、柱穴の配置からいえば4号住居が古く埋甕からいえば2・9号住居が古くなる。また、炉の位置からいえば、2・9・10号住居以外は、入口より奥壁に寄って造られているため、すべてが古く位置づけられることになる。この7軒の敷石住居跡は、すべての条件をクリアするものが無く、ある1つの条件だけにあてはまるのみで統一性がない。しかし、角度を変えてみれば、時期的な差がほとんどないともいえるのではないか。そして、出土している土器からみれば、曾利Vを主体としている住居と加曽利E4式土器と一緒にみつ住居があることも窺える。中谷遺跡では、以上に大月遺跡とは違い、思うとおりの条件に納まらなかった。

5 まとめ

大月遺跡の発掘調査は、保存状態の良好な敷石住居跡が6軒も発見でき貴重な資料となった。敷石住居の発展の過程を、初源期・成立期・展開期・終末期の4つに分ける意見を借りて、6軒の敷石住居を検証したところ、住居自体に微妙な時間差が生じることになってしまった。それに比べて、中谷遺跡の中期の敷石住居からは、あまり明確な結果が得られなかった。この違いは、どこから出てしまったのか、今後の課題となってしまった。

成立期は縄文時代中期終末から後期初頭という幅の広い範囲を取っているが、この時期の土器の線引きが流動的なところからおこることなのだ。この6軒の敷石住居も、加曽利E4式・曾利V式・称名寺式の3種類の土器が同時に存在する複雑なものであった。このため、土器については、時間が足りずほとんど触れていないが、詳細に分類すれば、更なる事実固めが出来たことだろう。

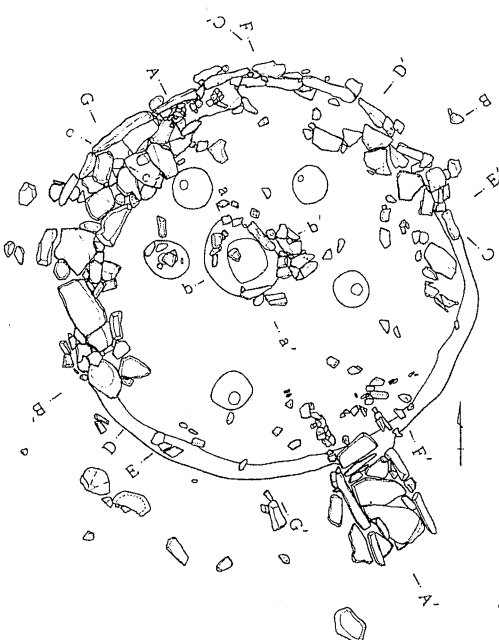
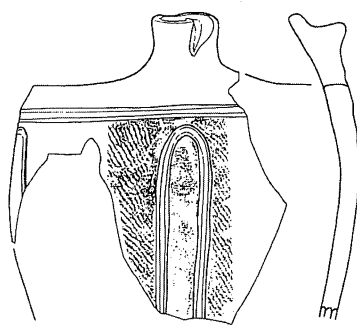
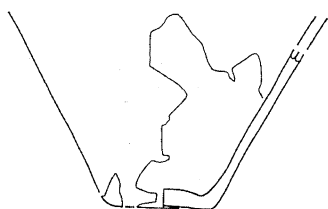
筆者は、中谷遺跡を調査したときから、敷石住居とは何だろうという疑問を持ち続けていた。遺跡全体とすれば、縄文時代中期の竪穴住居跡も何軒か発見されている。これについて、探れば探るほど難しく、用意に解決できる問題ではないが、山梨県では、初源期といわれる調査例は今のところ確認されていない。関東地方でいう加曽利E3式に相当する頃がその初源期といわれているが、大月遺跡では、この時期の住居跡は普通の竪穴住居跡



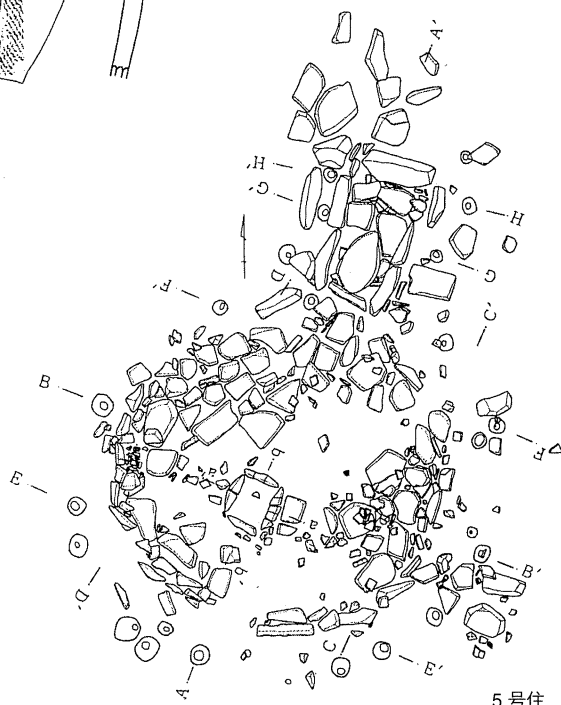
2号住



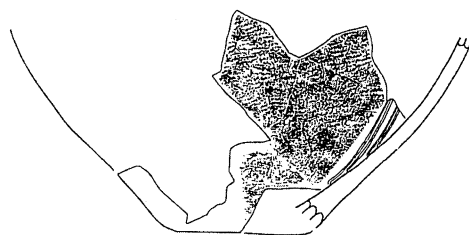
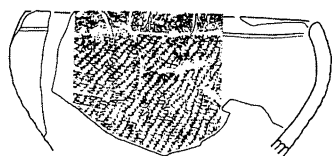
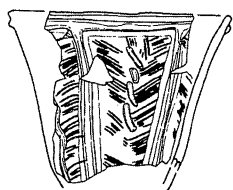
3号住



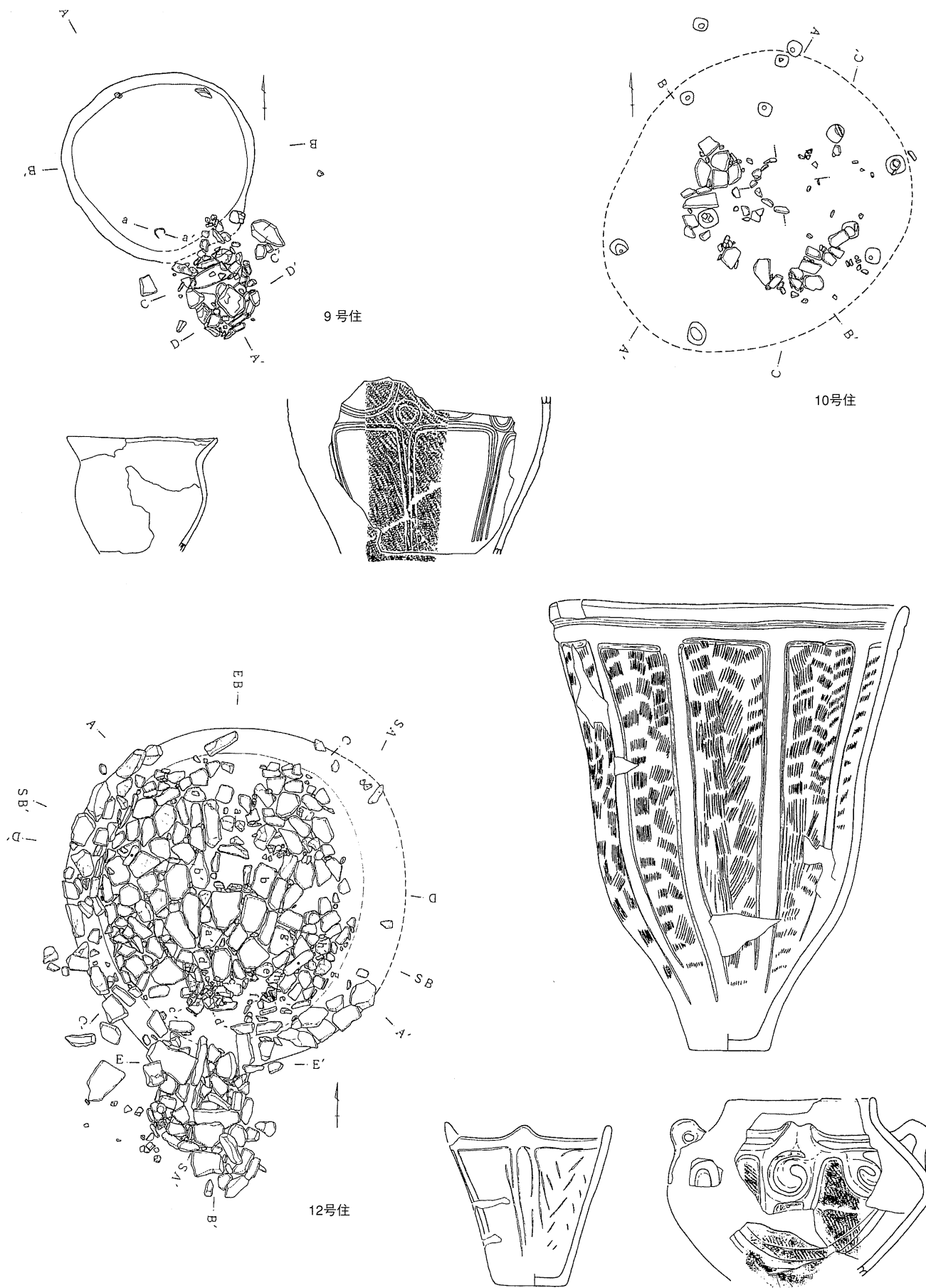
4号住



5号住



第4図 中谷遺跡 2～5号住居 (遺構 S = 1/80・土器 S = 1/8)



第5図 中谷遺跡9・10・12号住居（遺構 S = 1/80. 土器 S = 1/6）

である。炉は石囲いだが、特徴として上げられる奥壁側での石柱・石壇や入口付近に存在する埋甕部分の小張出などは確認できない。しかし、突然、竪穴住居跡の床面に石を敷くという行為を思いついたとは考えにくい。どこかに、このルーツがあるはずある。県内全体でも、比較的古い時期の敷石住居がこの県東部地域で発見されはじめ注目が高くなっている。それにも増して、この遺跡では、ほぼ同時期の住居がまとまりをもつことが窺える。縄文時代中期から後期に集落として展開した貴重な例である。今後、大月遺跡全体とその周辺の遺跡について細かな検証を加えれば、敷石住居の出現と消滅に係わる何らかの手掛かりがみつけれられるかもしれない。

註1 過去の発掘調査については、『山梨県史資料編1』に詳しいため、そちらを参照のこと

註2 柄鏡形の柄（円形）の部分のことを主体部と言っているようだが、ここでは報告書にもとづいて居住部という言葉を使用する。しかし、一般的に使われている主体部と同じ範囲を示すものである。

参考文献

- 櫛原功一 1995 「柄鏡形住居の柱穴配置」『特集 縄文時代中・後期の住居をめぐる諸問題』 帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第6集 帝京大学山梨文化財研究所
- 本橋恵美子 1995 「縄文時代の柄鏡形敷石住居址の発生について」『特集 縄文時代中・後期の住居をめぐる諸問題』 帝京大学山梨文化財研究所研究報告 第6集 帝京大学 山梨文化財研究所
- 山本暉久 1995 「柄鏡形（敷石）住居成立期の再検討」『古代探叢Ⅳ－滝口宏先生追悼考古学論集－』早稲田大学出版部
- 神奈川県立埋蔵文化財センター 1996 『平成7年度かながわの遺跡展「謎の敷石住居」展示図録』
- 山本暉久 1996 「敷石住居址研究の現状と課題」『パネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」資料集』 神奈川県立埋蔵文化財センター・（財）かながわ考古学財団
- 神奈川県立埋蔵文化財センター・（財）かながわ考古学財団 1997 『パネルディスカッション「敷石住居の謎に迫る」記録集』
- 長沢宏昌・笠原みゆき 1996 『中谷遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第116集 山梨県教育委員会
- 石井 寛 1998 「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』第9号縄文時代文化研究会
- 山梨県 1998 「大月遺跡」『山梨県史資料編1原始・古代1考古（遺跡）』